

1. 近年に熱帯病寄生虫学教室が取り扱った検査・診断事例の動向

熱帯病寄生虫学

川合 覚

【目的】平成13年度～平成19年度上半期に、当教室で取り扱った検査および診断事例の動向を調査した。

【調査対象】1) 対応件数の年間推移, 2) 臨床事案の依頼元, 3) 学内各科からの依頼件数, 4) 対応疾患の区分

【結果】対応事例の件数：①臨床関連325件, ②法医関連52件, ③青年海外協力隊関連2667件, ④その他28件。年間平均47件に対応した。その内、臨床事例は学外医療機関からの依頼192件(51%), 学内からの依頼149件(39%), 直接当科へ持ち込まれた依頼37例(10%)であった。学内各科からは本院18科, 越谷病院5科より依頼を受け、本院では消化器内科からの依頼が15件ともっとも多く、次いで眼科13件, 呼吸器・アレルギー内科10件, 第二外科8件, 感染管理室7件, 小児科5件であった。対応疾患の区分：原虫性疾患8種21件, 蠕虫性疾患16種236件, 衛生動物による疾患19種62件, その他の疾患9件に対応した。

【考察と結語】今回の調査により、当科では多岐にわたる寄生虫性疾患事例について対応していることが明らかとなった。また依頼は学内だけにとどまらず、学外から持ち込まれる事例も多いことが示された。当科は平成20年度より国際教育研究施設内に設置される熱帯病寄生虫病センターとして新たにスタートすることになっており、今後とも寄生虫性疾患の検査・診断業務およびコンサルテーション業務を展開する所存である。

2. 血液培養から分離された肺炎球菌の莢膜血清型と薬剤感受性および臨床背景の検討

臨床検査部

山本芳尚, 樽川友美, 岡本友紀, 大内友二,
及川信次

感染防止対策課

奥住捷子

臨床検査医学

吉田 敦, 家入蒼生夫

【目的】今回我々は、当院において過去5年間に血液培養から分離された肺炎球菌の莢膜血清型と薬剤感受性および臨床背景の関連性についてretrospectiveに考察を加えたので報告する。

【材料および方法】2003年1月から2007年3月までの期間、当院検査部で血液培養から肺炎球菌が分離された25症例を対象とした。

【成績】25症例の患者背景は、年齢9ヵ月～90歳(平均53.8歳)、男女比は男性18名(72%), 女性7名(28%)であった。莢膜血清型が検索できたのは16株で、8種類に分類され23型が4株で最も多かった。薬剤感受性成績では、ペニシリン耐性株が7株(28%)であった。治療に用いられた抗菌薬は、カルバペネム系が14例で最も多かった。臨床経過の詳細が確認できた20例中、基礎疾患を有する例が18例(85.0%), DICを伴った例が8例(40.0%)あった。転帰は死亡が9例(45.0%), 軽快が10例(50.0%), 後遺症有り1例(5.0%)であった。死亡例のうち、本菌による敗血症が死因と考えられた症例は6例あり、そのうち5例が血液培養採取時から72時間以内に死亡していた。

【結論】肺炎球菌による敗血症死亡例は急激な転帰をとる場合が多かった。しかし、本菌の莢膜血清型と薬剤感受性成績は転帰との関連性はなかった。一方、宿主側では男性、肝臓に関わる基礎疾患、腎機能の低下が死亡の危険因子としてあげられた。検索できた莢膜血清型8種類すべてが23価ワクチンに含まれていたことから、改めてワクチン接種の重要性が示唆された。